

令和2年3月2日

Always do what you are afraid to do. -最も困難な道に挑戦せよ-

臨時休校に際して - 読書のすすめ -

校長 稲垣 一郎

かつてのパンデミックによって人類が否応なしに経験したこと、それは、人の脆弱さ（肉体的にも精神的にも）を認識し、それを新しき糧にすることであったはずである。

14世紀のペスト（黒死病）の蔓延。今残されている文学にこの事実等が描かれているのは、一つはジョヴァンニ・ボッカッチョが著した「デカメロン」、また、マンゾリーニが著した「許嫁」であり、アルベール・カミュの著した「ペスト」である。

「デカメロン」は、ペスト大流行から逃れようと男女10人が郊外の邸宅にひきこもり、その退屈さをまぎらわすため、毎日10人が10話ずつのおもしろおかしい物語を語り合い、百話ができたという設定である。フィレンツェのそのあまりの惨状をボッカッチョは、「疫病によって人間の不正を罰しようという神の怒り」と言うが、しかし、その内容は、ペストにうちのめされた人々を励まし、立ち直らせようとする作者の願いであり、人間賛歌である。

「許嫁」については、ミラノのヴォルタ高校のスクイラーチェ校長が、同校のHPで生徒たちへ送ったメッセージが話題になっている。マンゾーニの名著『許嫁』(I Promessi Sposi)に書かれたペストの流行を引用して、「今の状況で最もリスクが高いのは、社会と人間性を台無しにすることだ」というメッセージを同校のHP上で2月25日に生徒たちへ送った。(詳細は、以下のHPを参照のこと。<https://romamayumi.exblog.jp/30767946/> (翻訳家 上野 真弓氏のブログより))

アルベール・カミュは、「ペスト」でその舞台であるアルジェリアの人々の様々な奮闘ぶりを描き、一見人間が勝利することでその小説は終わるように見える。しかし、その小説の最後はこう締めくくられる。

「ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、数十年の間、家具や下着類のなかに眠りつつ生存することができ、部屋や穴倉やトランクやハンカチや反古のなかに、しんぼう強く待ち続けていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストがふたたびその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差向ける日が来るであろうということ。」(新潮文庫 宮崎嶺雄訳)

これは、カミュの作品すべてに流れる不条理に通ずる人間以外の大きな強い力があることを強く表現している。

小生が諸君と同じ高校生2年生だった頃に「異邦人」を読んだ流れで「ペスト」を読んだことを思い出した。長い小説を読み終えて、人間の力の結集とその勝利に対する祝いを感じた一方、やはりこの小説の最後の閉じ方に不思議な気持ちを感じたことを今でも覚えている。それから45年後の現在、インターネットによって瞬時にSNS等でいつでもだれでも情報発信・伝達される時代となった。読書も紙媒体だけでなく、電子書籍でも多くの作品は読むことができる。(「青空文庫」では、非常に多くの名著を読むことができる。)

いつも忙しい湘南生の諸君、ミラノのヴォルタ高校のスクイラーチェ校長が言うように今だからこそ「良質な」本と出合ってください。いいチャンスです。また、休校が明けたところでお目にかかれることを楽しみにしています。

こんな時だからこそ、いつもと違うアプローチで「最も困難な道に挑戦せよ。」